

論 文

ケアの場における相互行為を分析するために  
— エスノメソドロジーの応用可能性に関する考察 —

小坂 啓史

日本福祉大学 子ども発達学部

For an Analysis of the Interaction in Care Settings:  
Consideration about the Application Possibility of Ethnomethodology

Hiroshi KOSAKA

Faculty of Child Development, Nihon Fukushi University

Keywords : ケアの場, 「ケア関係」, 相互行為, エスノメソドロジー, ビデオエスノグラフィー

要 旨

本稿は、福祉社会学でのケアをめぐる研究において、ケアの場に対する相互行為分析の応用可能性、有効性について検証することを目的とした方法論的考察であり、とくにエスノメソドロジーに焦点をあててその確認を行った。まず、ケアを「ケア」として成立せしめている状況は、その場における人びとの相互行為によってつくられることを確認した上で、社会福祉の近接領域での比較的数量少ない先行研究のうち、2つを検討した。その結果まず第1には、科学的理論化の態度が他者理解の本質とはなりえず、それが根ざす他者と共にある社会的場面での実践においてケア（療育）が問われるべきで、そのための経験的研究が促されることについて確認しえた。また第2に、エスノメソドロジーの観点に基づくビデオエスノグラフィーを用いた研究について検討し、この方法がケアの場のように言葉を介さないような空間においても分析が有効であること、さらに社会福祉領域でのケアに関しても応用可能であるとみなされ、ケアという相互行

為の社会的解明にとって有効であることが確認できた。

1. はじめに— 問題関心の所在

社会福祉研究、とくに社会福祉サービスの提供者によるケアの実践場面に関する分野では、専門的方法・技術の一般化やケアマネジメントの手續きについての考察とその批判、また実践過程において生じうる倫理的ジレンマ状況の分析、さらには「ケアの倫理」そのものを論理的に追及していくものなど、さまざまなパースペクティブでの研究がある。一方で福祉社会学におけるケア論は、その多くが臨床社会的領域に位置しており、藤村正之によると「高齢者を中心とする『介護』にとどまらず、障害者への『介助』、乳幼児の『子育て』といった諸行為を包含し、そこに共有しうるような問題を説き明かす概念」（藤村 2005: 527）として、またさらに「医療領域で、病者への治療たる『ケア』が含意する急性疾患への対応を越えて、慢性疾患や末期状態の患者への対応をめぐる問題」（藤村 2005: 527）として焦点化され研究が

進められてきている、とされる。では、こうした中において設定されてきた、これまでの研究対象はどのようなものであったのであろうか。出口泰靖によるとそれは「『ケア（介助・介護）され支援される側の人たち』であったり、それらの人たちにどのようなケアや支援をすればよいかといった『ケアや支援のあり方』」（出口 2012: 452）であったこと、その際の社会学者のまなざしは、ケア（介助・介護）や支援する対象となる人びとの「『身になって 考える』志向をとってきた」（出口 2012: 452）のだとしている。つまり、研究者の側は従来、ケアの受け手の立場に関する研究、あるいはそれを踏まえるという基盤・土台に立った上で、いわばケアの行い手側の視線ベクトルに平行した方向性をもつ研究を行ってきたのだ、と換言できるだろう。

最近の研究動向に関しては、「研究者自らが『ケア（介助・介護）』や『支援』の場で実際に介助や支援を行いながら、その自らの実践や行為の動きの“一挙手一投足”を省察しようとする」（出口 2012: 452）といったタイプの研究が現れてきたことが指摘されている。これは、研究者が介護者あるいは介助者となりケアの場の参与観察を行うことで、その自身の体験に基づいて考察をすすめる、というスタイルをとるもので、出口はこうした研究を先述の「身になって 考える」研究と対比させ、「身をもって 考える」（出口 2012: 453）研究と表現している。

このようなものの一例として、前田拓也による身体障害者の介助現場を対象とした研究をみてみよう。これは「障害をもつ当事者と、…介助者との関係性がどのように変容し、また、介助の『現場』におけるリアリティは、両者のいかなる実践によってつくりだされているかを、社会学的に明らかにする」（前田 2009: 10）ことをその目的とし、さらにこの目的に関わる問題関心として、次のような指摘をしている。

仮に「他者と共感し合う関係」なるものがありうるのだとしても、いずれにせよそこへ至る一定の時間、一定の過程を経ることではじめて可能になることであるはずだ。にもかかわらず、その「結果」を語る人々は、そこへ至る過程をついつい省略してしまいがちなのだと思う。一定の距離があったはずの「他者」は容易に「共感し合う人間」になって、そのためにあったはずの「時間」は、なかったことに

なってしまう。わたしの知りたいのは、その「過程」なのにもかかわらず。（前田 2009: 11）

前田はこのようにはならない「語り口」を考えつつ、「『介助現場』に、できるだけへばりついてきた」（前田 2009: 11）のだと述べる。ここで問いは、関係づくりが大切である、と示すことではなく、ケアをめぐる場においてどういった関係が成立していくのにかにある。従来の研究においては、ケアの現場での担い手が受け手の側に立つことへの期待や、実際的要請があったりすること、さらにはケアを行うことそのものが社会的に無条件に肯定されがちであるという、価値付与の土壌そのものが、現場での体験に基づくリアリティを丹念に描写・記述していくことに対して抑制的に働いていた、とも考えられるであろう。しかし、ケアの場で行われていることそのものは社会的相互行為なのであって、この状況を分析対象に設定し解明していくことは、福祉社会学的に非常に重要であると考えられる。

以下、本稿では以上のような考察における問題関心に基づいて、ケアの場で行われている「受け手」と「担い手」（この役割設定そのものに対しても、状況によってしばしば入れ替え可能な視点をとりうるのであるが）との相互行為の分析を念頭に、その方法の検討と可能性について考察していくこととする。まず続く第2章では、ケアの場において遂行される相互行為を分析する方法について検討していく。後半はその中でもとくに、エスノメソドロジーを対象に、考察を加えていくこととしたい。第3章では、療育や療養の場面においてエスノメソドロジーの視点・方法を用いて行った、近年の2つの研究論文を取り上げ、その内容について検討していく。第4章では本稿のまとめと以上をふまえた、社会福祉領域におけるケアの場におけるエスノメソドロジーによる研究、とくにビデオエスノグラフィーという比較的新しい分析手法を用いた場合の有効性について考察し、その際の課題についても明らかにし述べていくこととしたい。

## 2. ケアの場における相互行為を分析する視点と方法

本章では、ケアの場における相互行為を分析するための方法について検討していくこととする。まずは相互行為論の全般的な研究あるいは分析志向について概観していき、その本質的な特徴を明らかにしていきたい。その

上で、相互行為論の中でもケアの場における社会関係を詳細に分析しうるものとして、エスノメソドロジー研究の方法を取り上げ、その方法について考察していくこととしたい。

## 2 - 1. 相互行為を対象とした研究の特徴について

社会学において社会的相互行為（相互作用）を対象とする研究は、社会的行為論などとともにミクロ社会学の分野として位置づけられることが多い。この領域の研究は、社会そのものが社会的存在としての人間にとってどのような立ち現われかたをするのか、あるいはどのように成立してゆくのかといった視点をもつことに特徴があるといえ、社会の存在を前提とするというよりもその成立過程に焦点をあて、関係、秩序、規範や制度の遂行、構築を捉えていく視点を強くもつとよいであろう。つまり、社会を所与のものとしてみているのではなく、人びとのふるまい、行為がどのように、そしてどのような社会たらしめているのか、ということに焦点があてられていくこととなる。

社会学的には、こういった観点に基づくまなざしは、社会的現実の捉え方に関わるような（社会調査法を含む）研究・分析方法に対しても、当然向けられることになる。社会をそのものを与件としてみる、つまり実在する社会といったものを想定・前提とし、その構成内容や状況を捉えていくような統計的調査（量的調査）に対するものはもちろんのことであるが、しばしば質的調査における一つの技法として用いられることも多いインタヴュー法についてもそのような疑問が抱かれることになる。というのも、インタヴューという方法を実践している状況そのものが相互行為である、と捉えられうるからである。社会的相互行為論の立場においては、研究対象に研究者自身が関係していることそのものをも相互行為として捉えることができると考えることとなる。

インタヴュー法の実施方法においてはしばしば、インタヴューによるインタヴューイーとのラポール形成が調査の前提であると強調される。しかしこうした「調査」も、聞き手と話し手両者の「関係」でなされるものであって、「インタヴュー関係」というべきものがそこでは成立しているとみなしうる。従来の調査法の解釈では、このような関係そのものを認めること自体が、データに著しいバイアスを含んでしまうことと直結してしまうであろう。たとえ客観的な立場で実施されてい

るとみなしている調査であろうと、そこで会話としてのコミュニケーションが確かに成立している限り、調査者の影響を完全に排した形でデータを取得すること、そしてバイアスを除去したデータ解釈を行い得るということは考えにくいともいえる。この点に関して、例えば社会的構築主義の立場をとる J. ホルスタインと J. グブリアムは、次のような見解を示している。

そもそもバイアスということが意味のある概念になるのは、対象者が前もって形成された純粋な情報という商品を持っていて、それがインタヴューのプロセスによって何らかのかたちで歪曲されたと考えられる場合だけである。しかし、もしインタヴューの回答を解釈実践の産物とみなせば、回答は事前に形成されたものではありえないし、ずっと純粋であるといったこともありえない。回答は実践的に算出される。どんなインタヴュー状況も、それがどれほど形式化され、限定され、あるいは標準化されていようとも、インタヴューの参加者のあいだの相互行為に依存しているのである。（Holstein & Gubrium 1995 = 2004: 54）

つまり、社会調査としてのインタヴュー法を成り立たせているものは、調査法そのものについての正しい知識とその実践がなされているかどうかであるとか、調査者と調査対象者との間にラポールが形成されているからである、といった表現で還元するにとどまるものではないということである。そしてそれはむしろ、調査をする側と受ける側とによる相互行為の絶え間ない連鎖が、インタヴューという方法を示す現場としての「インタヴュー関係」を成立せしめているという点に注目すべきことを、示唆しているといえるだろう。

このように、相互行為による関係構築の過程に対してメスを入れていくという方法を志向していることが、一般的に相互行為論の立場であるということがいえる。そこで次に、この相互行為論の中でとくに徹底してこうした分析視点をとる傾向があり、「今ここで」成り立っている現実の相互行為秩序、あるいは日常実践としてのお互いの何らかのやりとりの中で生成する日々の活動の連鎖について取り扱っていく研究分野としての「エスノメソドロジー」に焦点をあて、主にその方法論に関する考察を行っていくこととしたい。

## 2 - 2. エスノメソドロロジーの方法について

エスノメソドロロジーとは、H. ガーフィンケルが創始した研究方法であり、研究対象である。エスノとは一般的には民族と解されることが多いが、ガーフィンケルはこの用語について「ある社会のメンバーが、彼の属する社会の常識的知識を、『あらゆること』についての常識的知識として、なんらかの仕方ですべて利用することができるということを示す」(Garfinkel 1968 1974 = 1987: 14) ことに注目して用いている。エスノという用語は従って、「特定の民族や集団を表すのではなく、『人びと』あるいは『メンバー(成員)』という意味」(水川 2007: 5) で使われており、結局エスノメソドロロジーとは「人びと(あるいはメンバー)の方法論」という意味をあらわしていることになる。さらに、ここでのメンバーとは、ある特定の集団の一員ということを表すのではなく、「集団や共同体に関わる出来事について何が起きているか見て言えること」(水川 2007: 8) を指している。ということは、日常生活を秩序づける方法についての知識を使い、人びとの相互行為がもっている目的を協同で成し遂げていく方法をエスノメソドロロジーと呼ぶ、ともいえるだろう(従って、エスノメソドロロジーとは研究対象であるということになるが、先述しているように研究対象であると同時に研究方法としても使われる。以下ではとくに断らない限り、後者の意味で用いていくこととする)。

こうした見解に基づけば、ある場において、ある人びとのやり取りを「ケア」としているのは、その場における本人たちの相互行為によって「ケア」を協同で成立させている状況によるのである、ということになる。ケアという行為をめぐる研究、第1章で述べた「身になって考える研究」の多くを含め、これまでの研究においては、行為者はその遂行においてそれぞれの意図をもっている、という分析者の前提の上、それを丹念に記録・記述するということによって分析の「正しさ」を担保してきたのだ、といえるだろう。しかしエスノメソドロロジーの場合、行為者の意図を正確に記述したとしても、それぞれを研究上の信頼可能性に直結させて考えるのではなく、行為者の意図が「その場のさまざまな活動と『いかにして』結びついて説明可能(アカウンタブル)になっているかということ」(水川 2007: 14) を対象としていくことになる。つまりケアの場においては、そこでなされる活動がア priori に「ケアである」と規定してその内容を分析していくのではなく、その場の当事者たちに

よるさまざまな活動が、どのようにその場の「ケア」を成り立たせているのかを考察していくことになるのである。であるならば、ケアをめぐる相互行為そのもののより詳細な分析が可能になるといえるだろう。

この点に関して、社会福祉におけるケアの場面とはやや異なるが、会話分析を用いた医療提供者と医療利用者との手術前の説明と承諾(インフォームド・コンセント: IC) という場面のコミュニケーション分析において、例えば櫻田美雄は次のようなことを述べている。

手術の IC 場面において、患者は単純に患者ではないし、医師も単純に医師ではない。医師と患者は「方言話者 — 方言話者」...としてであってもし、  
「不安の理解者 — 不安の当事者」...としても出会っている。その全体が、この会話を『説明』と『承諾』の場面として成り立たせているのである。  
(櫻田 2010: 151)

さらに、櫻田は次のような考察も加えている。

合意や共感が、「患者」本人からつねに必ず調達されているわけではない、ということも重要だろう。「患者家族」はあたりまえに場面で合意を調達されるところの当事者になっている...のである。確かに「手術同意書」の書面上では、「IC」は「患者」と「医師」とのあいだで成立することになっている。そこでは、患者家族は、単に副署する「立会人」という扱いになっているが、私たちが見た医療面接場面の現実には、そのような書面上の約束事とは違った現実になっていたといえそうなのである。(櫻田 2010: 151)

従来の研究においては、どちらかというと櫻田が上記引用文の中で述べている「手術同意書」の書面が、「ICの場」を成立させている有効なリソースに位置すると考える傾向があるのではないだろうか。しかし櫻田が述べるように、エスノメソドロロジー的立場においては、「ICの場」はさまざまな人びとのさまざまな活動(会話、意思表示、共感など)、可変的な関係それぞれが、周りの状況と結びついていき、成り立っていると考えられるのである。

では次に続く第3章においては、ケアに関連する、こ

うしたエスノメソドロジーの観点に基づいた方法論的考察をテーマとした研究と、ビデオエスノグラフィーという方法による実証的な分析を行い考察をした研究を取り上げその内容を検討していくこととする。これにより、社会福祉領域のケアの場における分析にどのような示唆を与えうるかという点について確認し、考察していくこととしたい。

### 3. 療育と療養の場面におけるエスノメソドロジー — 2つの先行研究から

本章では、エスノメソドロジーの観点に基づく、ケアに関連した近年の2つの先駆的な研究論文、中村和生・浦野茂・水川喜文著「『心の理論』と社会的場面の理解可能性 — 自閉症スペクトラム児への療育場面のエスノメソドロジーにむけて —」と、堀田裕子・榎田美雄「在宅療養者と介護者の相互行為分析 — ある脊椎損傷者の着替え場面に注目して —」とを取り上げ、その内容を紹介しつつ考察していくこととする。これらを取り上げることについては、社会福祉領域におけるケアの分析を想定した場合、その研究対象が非常に近い場所に位置づけることができるということ、さらにまた、その応用可能性についての見通しを得ることにとどまらず、これまで本稿で検討してきた従来の方法との差異を際立たせ、分析手法の有効性を提示することができると考えられるためである。

#### 3-1. 先行研究 「『心の理論』と社会的場面の理解可能性」の検討

まず第1の先行研究、中村ほか著「『心の理論』と社会的場面の理解可能性」(中村ほか 2013)であるが、目的としては発達心理学の領域で中心的に展開されている「心の理論 (Theory of Mind)」アプローチ (以下、「ToM アプローチ」と略)における、他者理解の捉え方とその問題点について明らかにしていくというものである。ToM アプローチとは、「人間の他者理解及び自己理解を、心的状態の推定及び、その状態の推論 (を通した説明及び予測) から一般的に説明するもの」(中村ほか 2013: 160)とされているが、換言すると行為者がその行動の意図をもっており、それに基づいてまさに行為をするとみなした上で、他者はその行為を推測し説明しようとする立場であるといえるだろう。こうした立場に対する有力な批判に関し、著者らは現象学、およびウィト

ゲンシュタイン派エスノメソドロジーに関連する観点からのものを取り上げ検討しているが、結論としては、「このアプローチとは真っ向から異なる他者理解観、行動から乖離した心的状態なるものを推定することなく、それゆえに推論を介することなく他者理解は行われるという考え方」(中村ほか 2013: 167)に至っている。

まず ToM アプローチに対する前者の現象学的批判について、第1に、A. シュッツの多元的現実論での科学的理論化の態度と関連するものがあげられている。それは「シュッツにあって、科学的理論化の態度は、日常生活において他者とともにより互いの行為を織りなしていく際にとられている態度とは相容れないものとして描かれており、他者理解の本質とはなりえない」(中村ほか 2013: 162)のであるが、それは「われわれ関係を成り立たせる生ける現在から派生してきたすべて時間的パースペクティブ」(Schutz 1962 = 1985: 66)のない、他者との関係をもたないものであるからである。そして実は、「ToM アプローチはその態度こそが他者理解の本質であるとみなす」(中村ほか 2013: 162)ことが、その批判の中心となっている。

第2の批判としては、ウィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの主張とも合致するものとされ、ToM アプローチは「自己経験は内的で他者には閉ざされており、他方で自己の行動は外的なものであり、他者 (及び自己) の観察に開かれたものである、とみなされている」(中村ほか 2013: 162) 視点をとっているが、この点が疑問であるというものである。その内容は以下のとおりである。

自己経験が純粋に心的なものであるなら、ある身体を自分自身のものと把握できず、同様に、他者の心的状態がただただ外的な行動を通すことによつてのみ知られうるのなら、それが自己の心的状態と類似すると思ふ必然性もないことになるはずである。... 我々は、自分の足に痛みを感じる際、痛みを心的に認知し、それとは別に足を観察するのではなく、足の痛みを端的に感じる。つまり、心とそれから根本的に乖離した身体などはなく、痛みが具現化された身体だけがある。そして、この具現的身体の理解可能性は他者に関わっている。我々は顔を赤面させる他者を前にすれば、他者の羞恥を端的に理解する。... 具現性が与えてくれる羞恥と赤面の自然な結びつき

があり、それが他者にかかれていてこそ、隠すことを望むこともできる... (中村ほか 2013: 162-163)

このような現象学的批判は、ToMアプローチの他者理解を「一次的間主観性」、つまり「他者という存在の認知、その身体動作を通した目的指向性の理解、表情に具現された基本的感情の理解とその表出など」(中村ほか 2013: 165)と「二次的間主観性」、つまり「一次的な間主観性に基づき、自己と他者とが共在する環境内で共通の指向対象を確立できるようになり、...実践的な文脈において成し遂げられるようになること」(中村ほか 2013: 165)といった代案に置き換えている。しかし、ウィトゲンシュタイン派エスノメソドロロジーの立場からは、上記の代案に意義を見出しつつ、「どんな間主観性であれ、他者とともにある場面における他者理解において、そうした他者理解から成る者として問われるべき」(中村ほか 2013: 167)であること、そして「他者理解はそれがそもそも根ざしている、他者とともにある社会的場面における実践において問われるべきものである」(中村ほか 2013: 166)ということが主張される。またこのことは、「様々な場面での様々な実践への参加可能性からすれば、何がしかの学習が行われている場面とくに注目することができる」(中村ほか 2013: 167)とされ、他者理解を解明していくための経験的研究を促しているという。

中村らはエスノメソドロロジーにおいて、自閉症スペクトラム児を取り巻く社会的状況、その療育の場における社会的場面の理解可能性が開かれるとしているが、以上みてきた内容は、介護あるいは介助や子育てなどのケアの場面においても共通するものであるといえよう。社会福祉領域でのケアの場においては、実は福祉専門職、とくに介護福祉士や保育士等の業務との関わりで、先述のシュッツの科学的理論化の態度、並びにToMアプローチがとるような、自己経験は内的で他者には閉ざされ、自己の行動は外的なものであるとみなしていくような方法(論)が語られがちである。こうした見方を乗り越え、目の前で遂行されていくケアをめぐる相互行為の分析を行うためにも、以上のような知見は有益であるといえ、また取り入れるべきものであるとみなしうであろう。

### 3-2. 先行研究 : 「在宅療養者と介護者の相互行為分析」の検討

2つ目に検討したい先行研究は、堀田ほか著「在宅療養者と介護者の相互行為分析」(堀田ほか 2012)であるが、これは前項でその可能性が示唆された経験的研究の、少なくとも一部分を具体化したものと位置づけることができる。まず問題関心に関してであるが、在宅療養の制度的整備の不十分さや家族の負担などの社会的問題に加えて、在宅療養の場における医療行為の境界線(医師—看護師、医療人—専門家など)や社会的場面の境界線(公的空間—私的空間など)の曖昧さをもつ当の現場に対し、その社会空間の特性を描いていくこと、患者が「主人公」である医療はいかにして可能であるか追求していく(堀田ほか 2012: 1-2)といったところにあるとしている。これらに基づく目的としては、「患者の現実として言語化されなかったり顕在化しなかったりする事柄を明らかにし、在宅療養の現場で起きていることを知る」(堀田ほか 2012: 2)、そして「在宅療養における合理性を見出すこと」(堀田ほか 2012: 2)を挙げているが、後者における「合理性」は科学的合理性のみに基づくというより、日常生活者のもつ「合理性」がその基盤としてあるかもしれない(堀田ほか 2012: 2)、ということを含意している。そこで、堀田らはビデオエスノグラフィという方法でデータを蒐集し、相互行為分析および会話分析によって考察を行っている。このビデオエスノグラフィという方法については、言うまでもなくビデオカメラでの映像撮影と音声録音に基づくものである。従ってこの方法は会話のみならず、相互行為場面を視覚的に記録することができるということになり、会話コミュニケーションのみに必ずしも依存しない、在宅療養といった場を対象とする研究においては有効なものであるといえる。またその分析可能性についての理論的根拠としては、E. シェグロフとH. サックスによる見解、つまり言葉によらない動作によって会話を終了し、またそのことが言葉の作用に代用される可能性さえ指摘しうる(Schegloff & Sacks 1973 = 1989: 238)ということより、動作のみで相互行為を成立させることが可能であることを示している(堀田ほか 2012: 3)。この例として、堀田らは次のような場면을提示する。

たとえば私たちは、窓越しに笑顔で手を振る友人に、なかば「反射的に」—すなわち、非再帰的に

—手を振り返すであろう。相手が友人であれば、なぜ手を振っているのかと考える必要はないであろうし、「友人だから手を振り返さそう」などと意思決定して手を振り返すわけでもなからう。…手を振っている相手が友人でなければ—あるいは、手を振り合うほど親しい友人関係にある相手でなければ—なぜ自分に向かって手を振っているのか、その「心」や「意図」を読もうとするかもしれない。…つまり、「意図」や「本心」を探求しようとするのは、けん責や相互行為が滞るような何らかの問題状況においてなのである。(堀田ほか 2012: 3)

従って、この問題状況がなければ、言葉によらない相互行為も成立可能なのであって、その場においてはエスノメソドロジーの見解に則したかたちで、実践が相互反映性をもち秩序を形成していっていると解しうる、ということになる。結局、堀田らはさらに次のように述べる。

在宅療養の現場は、習慣化し日常化した動作の連鎖する場である。会話という会話はほとんど交わされることなく、にもかかわらず、文脈と振る舞いは相互反映的に連なっている。また、そこは複数の参加者が直接的/間接的に関わる相互行為場面であり、一定の秩序と合理性がある。(堀田ほか 2012: 4)

以上より、ビデオエスノグラフィーによる分析可能性が指摘され、実際に遂行されることとなる。対象となるビデオデータとしては、「上着を着る」場面と「手袋をはめる」場面であり、前者では、その動作が会話分析における発話の連鎖構造を構成して相互行為が成立していること、(例えば医師など専門家が基づく判断基準としての)科学的合理性にはよらないが、日常生活において日々積み重ねてきた実践における(説明可能性としての)「合理的」な一連の動作がみられることについて指摘している(堀田ほか 2012: 5-10)。後者では、「分散する身体/分散に抗する身体」という図式に基づき、人体の中でも何ものかへと向かう意識の流れ、すなわち志向性を最も示す部位である目や、同じく強い志向性を有する手について着目した上で、とくに視線のもつ意義を確認する(堀田ほか 2012: 12-13)。そして患者の身体は、両手に同時に手袋をはめられていることで「分散している」が、視線を2人の介護者に交互に向け関与を示している

ことから、また患者が関与する限りで相互行為は達成されうるということから、「分散に抗している」と解釈される(堀田ほか 2012: 13-14)。このように言葉を介さないような空間においても、ビデオエスノグラフィーという方法に基づけば、患者とその周囲(人、モノ)との相互行為によって「在宅療養」という場の秩序が成立していることを分析しうる、ということが示されている。

以上のような方法は、療養の場のみならず社会福祉の領域における「日常的」なケアの場面においても、応用可能な方法であると考えられよう。社会福祉専門職者による介護・介助などのケアは、医療場面における高度な専門化がなされたそれと比較し、前述した日常生活者のもつ「合理性」が色濃く出てくるであろうことを予期しうる。であるからこそ、逆に科学的合理性に基づく部分が際立ってくる可能性があり、こうした部分と社会福祉制度がもつ業務の「専門化」志向との関わりがトレースしうることにもなるだろう。堀田らのこの研究もそうした意味で非常に示唆に富み、取り入れていくべき方法であるということができると考えられる。

#### 4. 結びにかえて — まとめと考察

以上、ケアの場における相互行為を分析するための方法論について検討してきた。この終章においては、これまでの内容を概観した上で考察し、浮かび上がってくる課題点について指摘していくことで結びにかえたい。

本稿における問題関心としては、近年のケアをめぐる議論に関して、「身になって考える」研究志向から「身をもって考える」というスタイルをとる研究が現れてきたことについて触れ、現場において実際にどのようなやり取りが行われているのかを探る相互行為分析の必要性と可能性とを探ることにあるとした。これに基づき、ケアの場で行われている相互行為分析の方法の検討、とくにエスノメソドロジーに焦点をあて、その方法論、視点の有効性について考察すること、また近接領域における実際の研究を取り上げ、その分析手法の応用可能性を考察することを目的とした(第1章)。

第2章では、相互行為による関係形成のプロセスに対して分析の焦点を合わせることが、相互行為論全般の立場であることを確認し、その上で日常的実践として行われる人びとの活動の連鎖がどのように秩序を形成していくのか、といったことを対象とするエスノメソドロジーの方法について検討していった。ここでは、ある場

において、ある人びとのやり取りを「ケア」としているのは、その場における当人たちの相互行為により「ケア」を協同で成り立たせている状況による、ということが確認された。従ってケアそのもの（＝相互行為）を分析対象とするためには、このエスノメソドロジーの方法を用いることで詳細に行われうることが確認できた。

第3章では、エスノメソドロジーの観点に基づく、近年の2つの研究についてやや詳細に考察していった。1つ目の中村ほか論文では、発達心理学の分野において主に展開している ToM アプローチに対して、現象学、そしてウィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの立場からの批判をみていき、そこから科学的理論化（A. シュッツ）の態度が他者理解の本質とはなりえないこと、そして主に後者のウィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの立場から考察すると、他者理解はそれが根ざす他者と共にある社会的場面での実践において問われるべきもの、さらにその解明のための経験的研究を促してさえいることについて確認した。2つ目の堀田ほか論文では、ビデオエスノグラフィーという方法を用いて分析を行った研究内容についてみてきた。結果として、言葉を介さないような空間における、ビデオエスノグラフィーを用いた分析が充分可能であることが示された。これは社会福祉におけるケアの場においても、応用可能であると考えられた。

以上より、社会福祉領域におけるケアの場に対して、エスノメソドロジーの方法がもつ分析可能性と、具体的手法としてのビデオエスノグラフィーについての有効性を認めることができるだろう。実際の調査・分析についてはこれからの課題となるが、その前提問題として浮上するのが、まずビデオその他の調査機材を用いることによるフィールドへの影響という点である。これに関してエスノメソドロジーの観点からいえば、機材そのものがその状況に組み込まれたものとして捉えられる、ということになる。第2章の第1節において、インタビュー法に対する社会的相互作用論の立場からの考察を行ったが、そこではインタビュアーという調査者が「インタビュー関係」という相互作用に組み込まれている状況、というように調査の場が捉えられたのであった。従ってビデオエスノグラフィーの場合も、「ケア関係」のみならず機材とその場における人びととの「調査関係」が成立している、あるいは機材もその関係に取り込まれた上での「ケア関係」であると分析され、解釈されることに予め

注意を向けねばならないだろう。しかしこのことが、従来のようなケアをされる側の人びとに視線を向け、ケアのあり方を考察するといった「身になって考える」研究、つまりケアがどうあるべきかという問題関心に基づく研究とは異なっていることや、ケアの場とされる空間の相互行為状況そのものを分析することで、いかに「ケア」が成立するか、つまりケアとはどのような相互行為であるのかについての理解、ケアとは何かという問いに対する社会学的な解明に向けられた経験的研究としての意義を削ぐものとはならないであろう。

またさらにもう1つの重要な問題点として、調査対象の選定段階におけるものが挙げられるだろう。在宅療養の場においても同じではあろうことは想像に難くないが、ビデオによる映像・音声記録が可能とされるフィールドを探索することについての困難が予想される、ということである。当然のことながら、調査過程におけるプライバシーの問題に関しては、調査票調査以上の配慮を要することとなるであろうし、また研究論文として作成する際の分析結果の提示方法についても同様であろう。これらに対する乗り越えと配慮とを遂げた上でデータの取得が可能となれば、社会福祉領域においても、ケアの場における相互行為についての解明が少しずつでも着実に進んでいくこととなる。またそれは、ともすると近年の社会福祉政策が有しがちな、ケアの提供者としての福祉専門職に対する管理・統制的傾向、さらにはサービス利用者側にも同様の傾向をもたらしかねない現状（小坂 2013; Kosaka 2011 などを参照）とも重ね合わせて考察することにより、ケアの「現実」を解明していくことにつながるのではないだろうか。

#### 文 献

- 出口泰靖, 2012, 「分野別研究動向（ケアと支援）——『ケア』や『支援』について 身をもって考える研究動向——」『社会学評論』63 (3): 452-464.
- 藤村正之, 2005, 「分野別研究動向（福祉）——親密圏と公共圏の交錯する場の解読——」『社会学評論』56 (2): 518-534.
- Garfinkel, H., 1974, the Origin of the Term "Ethnomethodology" in Roy Turner (ed.) *Ethnomethodology*, penguin, pp. 15-18, originally published as Pursue Symposium on Ethnomethodology, 1968. (= 1987, 「エスノメソドロジー命名の由来」山田富秋・好井裕明・山崎敬一編訳『エスノメソドロジー——社会学的思考の解体』せりか書房, 9-18.)
- Holstein, James A. and Gubrium, Jaber F., 1995, *The Active Interview*, Thousand Oaks, CA: Sage Publications.

- (=2004, 山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳 『アクティヴ・インタビュー — 相互行為としての社会調査』 せりか書房.)
- 堀田裕子・櫻田美雄, 2012, 「在宅療養者と介護者の相互行為分析 — ある脊椎損傷者の着替え場面に注目して —」 『徳島大学地域科学研究』 2:1-16.
- 櫻田美雄, 2010, 「病院に行く — 医療場面のコミュニケーション分析 —」 串田秀也・好井裕明編 『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』 世界思想社, 133-153.
- Kosaka, H., 2011, The Dominance of Care-Management Approach for the Elderly in Japan: The Emergence of Bio-Politics under the 'Long-Term Care Insurance' Act, 『現代と文化：日本福祉大学研究紀要』 123, 27-43.
- 小坂啓史, 2013, 「介護保険制度下のケアマネジメントとレリヴァンス」 『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』 127, 133-145.
- 前田拓也, 2009, 『介助現場の社会学 — 身体障害者の自立生活と介助者のリアリティ』 生活書院.
- 水川喜文, 2007, 「エスノメソドロジーのアイデア」 前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編 『エスノメソドロジー — 人びとの実践から学ぶ』 新曜社, 3-34.
- 中村和生・浦野茂・水川喜文, 2013, 「『心の理論』 と社会的場面の理解可能性 — 自閉症スペクトラム児への療育場面のエスノメソドロジーにむけて —」 『関東社会学論集』 26, 159-170.
- Schegloff, E. A., and Sacks, H., 1973, Opning Up Closings, *Semiotica*8 (4): 289-327. (= 1989, 「会話はどのように終了されるのか」 北澤裕・西阪仰訳 『日常性の解剖学 — 知と会話 —』 マルジュ社, 175-241.)
- Schutz, A., 1962, *Collected Papers I: The Problem of Social Reality (Part III: Symbol, Reality and Society)*, edited and introduced by Maurice Natanson (*Phaenomenologica* Vol. 11), Martinus Nijhoff, The Hague (= 1985, 渡部光・那須壽・西原和久訳 『アルフレッド・シュッツ著作集 第2巻 社会的現実の問題 [II]』 マルジュ社.)